

# 三河 アララギ

2025年 令和7年3月 弥生  
やよい

三 月 号

第七十二卷 第三号

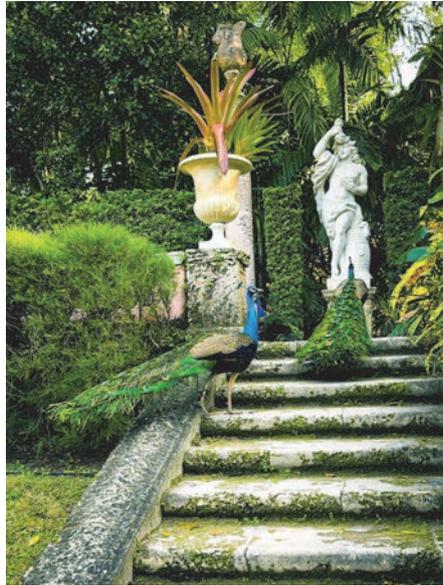


ニューヨーク日記(221) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

VIZCAYA GARDENS

## Blue Shoe Diaries



マイアミといえば、みんなビーチやナイトライフ、そして活気あるラテン文化を思い浮かべるよね。でも今日は、そんなマイアミのまったく違う一面を体験しました。訪れたのは Vizcaya Museum and Gardens (ビスカヤ博物館と庭園)。そこはまるで南フロリダに隠されたイタリアのような、思いがけないヨーロッパの雰囲気にも包まれていました。手入れの行き届いた庭園はどこを切り取っても絵になる美しさ。そして何より、自由に歩き回るクジャクたちがこの場所の魅力をさらに引き立て、まるで別世界に迷い込んだような気分させてくれます。

When people think of Miami, they picture beaches, nightlife, and a vibrant Latin culture. But today, I experienced a completely different side of the city at Vizcaya Museum and Gardens. It felt unexpectedly European—specifically, like a slice of Italy hidden in South Florida. The gardens are lush and meticulously designed, with every corner offering a picture-perfect scene. And as if the setting wasn't magical enough, peacocks roam freely, adding a touch of old-world grandeur to an already enchanting place.



歌集 わが冬葵

御津磯夫

大砂漠のただ中に出會ひて停戦の調印をする國をみつめよ

刈りあとの稲田の見ゆる寺の庫裡くりにたのまれて十分ばかり坐りぬ

ふかき落葉踏みいざなひてわが家の公孫樹いぢやう大樹の幹仰がしむ

もたらししものはみなよし仔こもち柳葉魚ししやも仔もち若布わかめもさりさりとして

小さき徑を歩むなかれと幼かりし人にきびしく教へたまひき

苔の上に据えし紫香樂しがらきの古き甕かくみて細き青竹なびく

白き種子となりてころがるを土に埋めてたちまち疼いたき腰のばすかな

風知草ふうちさうのいまを限りの黄のいろにこころを寄せてわれは見むとす

われの手のとどく下枝に小鳥らの残しくれたる熟柿をあつむ

霜八度ふり置く見れば夏の夜に高く匂はむ花の坐り葉

歌集 「草々」

今泉米子

志賀山に入らむとしつつ立ちどまり見上ぐる石の何のみ佛  
先だてる夫はや見えぬ雨水の走りしあとの志賀ののぼり路  
心あてに登り來たりつ志賀寺址青葉の奥の一つうぐひす  
人音のなき山の上の寺の址礎に昨夜の雨のたまりて  
うつぎ白く残れる山を子の病ひ癒えて伴はむ日をぞ戀ひつつ  
山寺の山水おちて滋賀里の家の間の溝に音たててゆく  
勸學の町名區劃正しくて梵釋廢寺の跡を記さず  
人住める中の空地は廢寺のあと南にひらけ夏草しげる  
北白川のたぎちに沿ひて今つくる大き家居はベニガラを塗る  
運轉手も吾らも知らず高圓を切りしを越ゆる御陵おもひて

はゞきくさⅢ

大須賀寿恵

ブラウン管通していで来るわが声よひとりの部屋に顔あからめる  
詫びやうと心にきめしあかときに鳩鳴き出でぬ弘法山に

スモン病み動けぬ足の大写しわが足もそのよじれるに似る

ベコニアの鉢を露地の水たまりに置く如露にてそそぐ力なければ  
くろぐろと葉の茂り合ふ蜜柑畑十日の月に光る実をもぐ

畑隅に垂れし蜜柑の青き採るミヅカヤツリの露に濡れつつ

根付きしをくだされし君は病み給ひ木芙蓉は朱に大きく咲き出づ

病む足の保護は鍛錬に切り換へむ膝をつかずに這ひながら拭く

ひろげたる掌の上にカナヘビはためらひもなくのぼり来にけり

わが受くる身障者手帖に貼る写真富士がバックの半身えらぶ

二〇一八年三月号より

夏目勝弘

散歩する道に一本の山桜さい細の枝の艶めくを見る

杉花粉をたっぷり含みて重重し花粉症には罹らずになる

竹藪を波だてわたる風の音地中の竹の子いまか今かと

縄文の人等の主食の一つなりナラの若木は枯葉を落とさず

川沿を吹きすぐ風に飛ばされし帽子が舟なし流れて行きぬ

いち早く白き花咲く木蓮のその枝枝に銀なす花芽

寂寂の冬を彩る赤と白と花の満ちみつ春はまださき

春を待つ己れの準備は何ならむ日中ひなか本読み日没にて寝る

先ざきの事など思ふも詮方無しカレンダーに予定を書きたす

つつが無く新年を迎へ門松を取り去りうららの日射しを待つ

『歌集 八千代』

蒲郡 岡本八千代

中指の瘰癧を病みてけふは五日長きチヨークをえらびて使ふ

朝掃除する生徒らをみて巡る海よりの風の遠き校庭

西浦中学は磯松山の上にありき春蟬鳴き交す季かと思ふ

黒竹の靡ける側の窓開けて親子四人の弁当包む

耳しひになりたる母がまた今日も夜おそくなる我を待ちらむ

翳りくる渡りの土間に保護者会の中の一人の母親を待つ

通知表を親に渡さむ保護者会この夜もこられぬといふ一人あり

渡したる通知表など開かず  
に礼したるのみに帰りてゆきぬ

はじめの試みの夜の保護者会に  
中瀬康男は父親が来る

獣医になる希望捨てるなどわが書きし  
通知表の所見欄また読みかえす

古き沼二つ見えぬる磐梯の高原ホテルの  
二階に泊る

五色沼にくだりてゆきてたちまちに友らは  
山の雨にかへり来

磐梯の高原の宿の上に舞ひてゐる鳥こと  
さらに大きく見えつ

行くところ靄たちこむる山の道会津の  
バスののろのろとして

女教師のわれら四人の宿の夜誰の香水か  
いつまでも匂ふ

## 白菊

豊川 弓 谷 久 子

子も孫も空も大地も平穏な年にてあれよと心に念ず

白菊を供華にと供ふる正月に夫逝きてより二十一年

黒表紙に金の横文字ダイアリー我が足跡が並ぶ本棚

ボールペン十本買えと子が言ひぬ福引当たる千円なれど

「元気よ」と受話器の中の弾む声久びさに聞くまさ子さんの声

手作りのバック送らむと思ひたつ東京暮らしのまさ子さん達に

バケツの中の氷は終日厚きまま淡雪はやばや消えてゆきたり

大雪に大混雑の都心のニュース東京暮らしの君を案ずる

着てくれる人があると信じつつ半天縫ひ上ぐ三日かかりて

半世紀ぶりの寒波をとりどりの色にパンジー咲き続けをり

## 生きてゐる

東京 今泉 由利

太陽の日ざしあまねしサニーアイルズ地球の上に生きてゐるゐる

宇宙とは地上100km空気のほとんど無きあたりとぞ

なつかしきごとくに話すスペイン語五十年前のアルゼンチン国に住みをりしこと

光といふ漢字のごとく三本の光線ともなひ朝の陽きたり

大西洋地球の丸みにカーブして水平線より今日の朝の陽

おだやかにおだやかなまま明けてゆく12月28日土曜日朝

水平線の一本の線空と太陽とあかるみ始めむ明るく明ける

真地球は46億歳と知りにつけり太陽のまわりを回り続ける

水平線よりモコモコ入道雲今日の夕日の色をまとひて

太陽と過せし人々三々五々帰りゆきたり誰もいなくなる

大西洋の水平線より一直線私のベッドに朝明ける

太陽をい出て8分20秒私のもとにあまねし朝の陽

水素原子核ヘリウム原子核40億年の太陽エネルギー核融合

おだやかにおだやかにしてすがすがしいマイアミの海に向きをり

ズブズブと歩みゆきゆくマイアミビーチ磯砂まみれのスニーカー

## やぶ椿

豊川 安藤 和代

雲ひとつなき新春の大空に、生きるぞ！生きよう、両腕ひろぐ

新年の望みは高くあらずしてインスタントのコーヒー旨し

マイナ保険証吾にはややこし通院も週を延して喫茶に遊ぶ

老ゆる身に昭和なつかしやぶ椿かくれる様に紅を光らす

歌を詠み絵手紙数独漢字ドリル庭木チヨキチヨキひと日は終わる

手も足も私なりに動く今おしゃべりなんて大得意です

なるならばも一度ピアノを習いたし吾が身に遠しピアノ教室

動画から曾孫の成長喜べば顔の小皺の多くなりゆく

今よりは少しは美し若き日の写真に見入る暖き縁側

♪眼鏡どこ！♪スマホはどこ？♪と今日も又遠くで鴉が笑っています

アララギ誌歌詠む御人の名は知れどお会いしたいと思う人あり

糖漬けの胡瓜程よく漬かりしか深き緑の輝きを見る

形見にと渡したネックレス新春の娘の胸に鈍く光りて

ボタンひとつで乾燥迄する洗濯機余暇を歌詠み満足な日び

子も孫も曾孫も事なき昨日今日「幸せです」と霊に合す手

## 桃子

豊川 山口千恵子

小鳥らは青空よこぎりとび去りぬ鳶の鳴き声二声三声に

冬空にひびきわたれる鳶の声小鳥らそれぞれ急ぎとび去る

山茶花の花びら赤く散る道を歩きてゆきぬ風に吹かれて

もぎ取りし柚子を浮べて浸る風呂何ごともなく一日のすぎたり

冬の田に群れてうごめく鴉からすその羽黒々何つひばめる

庭師来て剪定はじめし庭の松手入れ楽しみし夫今日デイケア

花嫁の桃子よりわれへの花束はひと月余りまだ美しき

川土手に呆けし芒の穂なびく近道して行く園芸店に

自転車の前かごにのせ冬の道を馬鈴薯の種薯一キロ

一巡り園芸店の花を見てツルムラサキの種を一袋

初咲きの水仙切りて供華とする墓原静か朝の日温し

朝出でて剪定済みたる庭に出づ切りつめ寒々寒椿の枝

睡蓮の鉢にはりたる薄氷終日とけず寒の日暮るる

細々と芽生えて青き条をなす休耕田の小麦の畝の

わが歩む前を横切り行く小鳥背黒セキレイ今日は二羽見る

## アイスマン

蒲郡 杉浦恵美子

電柱の蔭にはあれど我が窓に五井山見ゆる一寸彼方に

我が窓に五井山が見ゆ正月のまばゆき空の片雲の先

五井山のふたつの峰の標高差際立ちにけり我が窓からは

五井山のふたつの峰は見上げたる場所によりては高低差なし

今朝もまた五井山見上ぐ此処からは高低ふたつの峰がくつきり

ボルツアーノ折角此処まで来たからはお目にかからんアイスマンとは

アイスマン氷河に埋もれて五千年二十世紀に日の目を見るとは

アイスマン発見されたりイタリアとオーストリアとの国境付近

アイスマン自然ミイラ化奇跡とぞ衣服も道具も銅器時代残る

アイスマン保存されしは冷凍庫小さな窓より対面一分

アイスマンとご対面とは言へませぬ左腕下にうつ伏せのため

アイスマンを見て後街をぶらつけば此処はまさしく南チロルぞ

予定にはない上知らざるアイスマンと対面するとは旅のおもむき

ボルツアーノ道路標示もドイツ語とイタリア語とが併記してあり

アイスマンを知りてこの街ボルツアーノ一層馴染めり奥伊共存

## 寒中見舞い

大阪 伊藤忠男

春近し明日を夢みて耐える今木々の年輪その証なり

遅れをば取り戻さんと今の今今日の寒さは甚だしきや

何年に一度の寒波列島を襲い帳尻合わせるなりや

炬燵から出られぬままに一日を過ごす窓越し雪景色なり

障子戸の僅かな隙間布挟み風を防ぐも焼石に水

冷たさの身に染む夜にもがりぶえ虎落笛眠れぬままに更けて行くなり

薪割りの懐かし音に目を覚ます今は和歌山炭焼きの里

光受けきらりと煌めく朝の雪足跡ひとつ残るひと時

寒き朝飛び交う鳥の羽に触れ枝葉の雪が舞い上がりたり

雪雲に覆われ暗き昼下がり今日の歩きは百歩以下なり

咲き始め梅のほころび愛しき我もかくあり春待ち望む

雪の舞う国道沿いの早桜咲きて招くか春はここにと

たなびきて山すそ霞む里の朝光やわらか我が庭の春

雪纏いたくましく咲く山茶花に元気いただき朝家を出る

松明に照らされ経読むお水取り春は直ぐそこ目の前なりや

庭中改修(その十二) 豊川 白井 信昭

古いにしえの引馬野の道思い来て『泉橋』跡あと我右まがる

石碑常に供花のあり刻まれし左御油ごゆ右吉田よしだ道標みちしるべとも

持統帝引馬野あんぐう行宮ぎやうぐう繋がりき『二見の道』ここ分岐点

万葉集たけちのむらじくろひといも高市連たけちのむらじくろひといも黒人妹詠みし相聞歌二首今に伝える

蒲郡やわとみ八富神社幾本の三河黒松こも太く菰こもに巻かれあり

一本の大紫躑躅つづじ生垣に今年こそ花多く咲かせむ

腐葉土の土のう袋に十八余りようやく終えて春を待たなむ

ふき荒べる渥美湾濃く青青と風うねり皺寄せる白波

潮入の公園花壇位置しめて一本山茶花真つ赤くたけなわ

今日もまた潮入の浜散策路桜木広場今は裸木

息子植えし桜の苗木一本の幾年なるや親木となれり

相<sup>さがら</sup>楽より青島蜜柑頂きて息子帰りに一袋もたす

暖かくストーブの居間家族五人<sup>たり</sup>西南西に恵方巻がぶり

清州なる豊川堤防学校よりは遠遠として歩き行きにき

小生の春の遠足に行きしかの瓜郷<sup>うりごういせき</sup>遺跡<sup>いせき</sup>思い出<sup>おも</sup>だせる

## 成人の日の

埼玉 矢崎 直人

成人の日の冬青空の青空よ青き未来を見詰める眼

イマココで必要なのはどの支援なぜから支援を考えてみる

なぜなのか一步深くに考えて答えを探して歩める支援

駅からの会場までの道のりをただただ人の後ろをついて

試験終え俳句と短歌に向かい合いまた改めて自分を見つけ

言いたいをききたいことを全部言い全部をききて明らかくこと

蠟梅が懺悔に見え来旧ソ連アフガニスタン帰還兵の証言

やれることやりたいことをやれるだけやってみいまの自分のままに

はなしたくないからそのままそのまま無為にままになれたら

ここにいたいその一番の理由いかん責任感と望みと覚悟

プリンターのインクの型の在庫なし他の店では見つけられるか

大型犬中型犬と目撃の情報岩槻転々変わる

人類の存在発生根源を根こそぎに問う宗教哲学

からつ風一縷の望みかけてみるそんな気になるその気にさせる

ロウバイや疑心暗鬼の上に咲く日米首脳微笑みの腹

『いよよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

シャツターが降ろされ久し岡田屋さん酒饅頭の旗今日もなし

鈴木美耶子

もうすでに形も消えぬ消防署小春の青き空の下には

ネックレス落としてしまふどなたかに拾はれをるか土の中にか

とつても気に入っていたネックレスを落としてしまい、残念でなりません。どなたかの胸で輝いていて欲しいです。

高々とト口箱積める軽トラに魚は在るのか荷台乾きて

牧原正枝

ト口箱は知らぬ屋号が印される何処まで行くか幡豆を過ぎたり

娘の資料胸に抱きてさあ行くと娘をふりあふぎ「車椅子推して」

冬の朝、ト口箱積んだ軽トラの後ろについて走り、魚のにおいがせず漁獲量の少なさを実感してしまいました。

鳶十羽群れて電柱に集まりぬ天辺にほらいつものあの鳶

森 厚子

蕪大根ジャンボレモンを持ちくれし友と語らふ日なたほこしつつ

新しきカレンダーにまたシール貼る誕生日メモの一つふえたり

友と奥さん、夫と私は同級生です。彼女は長らくベッドか車椅子…。介護生活乍ら自慢の作物を持ちくれます。

若者は山道をゆくただ一人本丸目指し時雨の中を

水野 絹子

十二階の風呂の湯波立つ能登の宿くつろぎゐるに今しの余震

大仏をつくりに行くと言ひし人思ひ出しゐる越前の寺

石垣が能登地震で崩れた七尾城を訪れた際、自転車に登る若者を見ました。群れない姿勢が新鮮でした。

一年の行事ありても年毎に省略したきを心いましむ

牧原規惠

足腰の衰へわれも自覚せりそろりとそろりと階段下りる

お互ひに一年無事に越せたことまず一番に姉にメールす

自分自身、年を取ったなと思うものの、身近にボランティアに勤しむ人達を見て勇気もらっています。

シルバーカー使ふ事なきもう二度と母の引く癖残してポツン

稲吉友江

仲間らと「母さんの歌」合唱すふいに流れる涙に驚く

年末に夫婦揃ひて寝込みをり食料届けてくれる友あり

年末に二人寝込んでしまいました。子供三人は遠方、姉妹もダメ、頼りになるのは、やはり友でした。

ぶつちぎり四時間あまりの爆トーク一体何を喋ったのか

大武智子

玉翁土星の輪のやうに花が咲く甥の結婚遙かになりぬ

父母もゐて夫も在りし日さざなみの琵琶湖大橋共に渡りき

女子ばかりのミニ同窓会。四時間みつしりの濃いおしゃべりだったんだけど。

## 現代学生百人一首

東洋大学

天気予報風のボクサー映りだす西からおそう右ストレート

慶應義塾普通部2年 近藤 悠成

わからない君の指し手も感情も誰か教えて恋の五手詰

慶應義塾普通部3年 杉本 創

植物は文句を言わずかわいいな水やりながら母はつぶやく

慶應義塾普通部3年 林谷 彬生

妹の寝顔にそつとごめんねと言うくらいなら優しくしろ俺

慶應義塾普通部3年 涌井 夕輝

先輩の「勝った!」のLINE届くこと信じて磨くサッカーボール

中央大学附属横浜高等学校1年 吾妻 こと葉

音のない世界で私達手で話す画面ごしでも笑い合えてる

横浜市立ろう特別支援学校2年 平賀 梨里穂

十七色のSDGsが叫ばれる僕らの日常変わらないけど

東京学館新潟高等学校1年 五十嵐 天邑

一年生黄色の帽子は道に咲くタンポポのよう五月の朝の

東京学館新潟高等学校1年 小林 優汰

『俳句』

小さき音小さく響き野分晴

植村公女

整然も雑然も好き鰯雲

秋澄むやすれ違いをり松葉杖

印西に白鳥鳴くや友逝きて

木村歩歩

冬薔薇の咲けよと願う能登地震

弾き初めに爪擦れの音筑紫琴

白隠の達磨が睨む巳正月

雪だるま眼がんのうびちよく横鼻直の善きお顔

東海道下るや寒の路線バス

今泉如雲

初午や伊勢屋三軒ある通り

除雪車の「ケイティー」に来てほしき朝

成人の日の冬青空の青空よ

矢崎直人

からつ風一縷の望みにかけてみる

ロウバイや疑心暗鬼めきて咲く

二月来る試験を受ける二月来る

秒針の止まる試験場冬曇

袋果は拳こぶしのかたち辛夷こぶし

今泉由利

アマゾン河逆のぼりゆきアサイベリ

ピラニアをつりあげにけり常夏日

一歩一歩地球をゆきぬ夏麗

選ばざり地球の上の春夏秋冬

黒き土踏まないままに秋に入る

霜月の海水浴やマイアミビーチ

ききょう科の多年草にてホテルブクロ

板根樹むきだし根っこ打ち鳴らす

ジャングルに板根打のひびきゆく

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

正道を心に念じ初日の出

木風

冬晴れの笹のみゆれるテラスかな

気も晴るる今年初めの満月や

清冽や富嶽のすがた寒日和

嫁が君出会うことなく二十日過ぎ

小春日や吟じながらのウオーキング

菱泉

公園の子供等の声冬の空

ゴンドラはサケ吊し終へ客を待つ

紀風

立冬の空澄む中柿一つ

銀なんの香り散らすや境内か

散歩道ところ狭しと落葉かな

一群の鳥電線や夕時雨  
花柵古木なれども香りけり

つねこ

初日の出寝惚け眼もまんまるに  
車窓から富士の雄姿や冬の空

春山

初打ちやナイスショットは夢の中

郷泉

散歩みち肌さす風や春浅し  
亡き師へと吟声届ける風光  
詩吟会爽やかに舞う友のあり  
寒空や病む姉見舞ふ北陸路

はる

## 折々の詩(十二)

ふじのけんじ

### ある駅員の告白

ここは乗り換え駅なんです  
いろんな人が来ます

ほとんどの人は  
なぜ もっと乗せてくれないんだ  
降りるのは いやだと 叫んでいます  
そういう人に限って  
両手にたくさんの袋を持っています  
それは乗り換え列車には持って行けないので  
この駅で捨ててくれと言います

ある人は 逆方向の列車に乗りたい  
乗るためには いくらでも払うと  
私に詰め寄ります  
でも それはできないと断ると  
急に大人しくなると

次の電車に乗り換えていきます

また ある人は とても 準備がよく  
前の電車が着くと すつくと立ち  
隣の電車に静かに乗っていくのです

ここは 団体客はいないんです  
みんな 一人で乗るかえていきます

この駅は時刻表がないんです  
電車がいつ来るか私にも分らないんです  
また乗り換え列車はいつたいどこへ行くのでしょうか  
誰も行先を聞いたことがないので

ああ また電車が来ます  
おそらくたくさんの人を乗せているでしょうね

ああ、またあそこで降りたくないと叫んでいる人がいます  
また説得しないといけないですね  
では行きますから これで

## 五感を澄ませば (33)

杉浦恵美子

### 築地明石町

今回は鑄木清方の美人画のお話です。

最近、沢木耕太郎のエッセイを読んでいる、「ん？」と思う箇所がありました。

「・・・寄り道の、さらに寄り道をするにしたいのだ。当てずっぽうに、右に曲がり、左に曲がりしていると、古い屋敷町の中で不意に『鑄木清方記念美術館』なるものにつかり、ふと入ってみる気になった。(中略)

順に見ていくと・掛け軸風の細長い画面に、黒い羽織を着て素足に下駄で立つ美しい女性の姿を描いた一枚があった。何かの下絵らしく塗り残しがある。そこを行き過ぎようとして、タイトルに『築地明石町』とあるのが目に留まり、内心、『あっ』と小さな声を上げたくなった。これだったのか、と。

私の父は晩年に素人俳句を作っていたが、死後、仲間と出していた句誌に何編かのエッセイを書き残していたのが見つかった。

その中に父が生まれ育った築地の小田原町について触れたものがあり、そこにこんな一節があった。

(隅田川を少しさかのぼった隣町が明石町だ。清方が描いたような美人が、果して明石町に居たものやら私達子供には知る由もないが、小田原町とはがらりと変わった品の良い、一寸ハイカラな空気が流れている所だとは子供心にも感じられた)(中略)

どうやら、この女性にはモデルがいたらしい。清方が描いた時期などからすると、父より少し年上であったようだ。しかし、年齢はともあれ、もし彼女が明石町で生まれ育った女性なら、少年時代の父とどこかの通りですれ違っていたかもしれない。『旅のつばくろ(寄り道の効用)』新潮文庫

モデルは**江木ませ子**という方です。

沢木氏とは逆に、私の場合はあの有名な美人画のモデルはこの人だったのか、です。

私はこの方の名を、大正三美人の一人、江木欣々を調べていて知りました。

欣々の異母妹です。

作家長谷川時雨が「江木欣々女史」という作品の中で、欣々の晩年について訊ねに行った場面があります。

「わたしはふと、ませ子さんに欣々さんの死ぬ前の様子  
がききたくなつた。(中略)」

ませ子さんも、清方画伯が『築地河岸の女』(注筆者  
の記憶違い)として、いつか帝展へ出品した美しい人  
である。病後とはいえ、ふと打ちむかつた時、欣々さん  
こども似ていたかと思うほど、眼と眉がことに美しく、  
髪が重たげだった。(中略) 古代紫の半襟と、やや赤み  
の底にある唐繻子の帯と、おなじ紫系統の紺ほいお召の  
羽織がいかに落ち着いた年頃の麗々しさだった。(青  
空文庫)

彼女については、清方自身が

「○遠く回想する明石町の立ち罩めた朝霧のなかに、(中  
略) 知人江木ませ子さんの、睫毛の濃い濡色の瞳が見え  
て、そうしてそこに姿を成した。この人は妻の同窓で、(以  
下略)」

○私が好きでかく明治の中ごろ、新橋の駅がまだ汐留  
にあった時分で、もう出るのに間の無い客車に送るのと  
送られるのとふたりの美しい女学生を見た。(中略) 昭  
和二年にかいた『築地明石町』に面影をうつしたM夫人  
はその時の桃割れの女学生だった人で、私の家内と女学  
校のともだちなのだ。」

と、幾度も随筆に綴っているようです。

さて、この作品はあまりにも有名で、私も一、二度は  
見た気がしますが、実は一九七五年以来44年間行方不明  
だったとか。発見後現在は東京国立近代美術館に収まっ  
ています。

ついでに、築地明石町は、明治期にはハイカラな外国  
人居留地で、背景の水色のペンキが塗られた柵は、そこ  
に洋館があることを示し、朝霧にかすむ帆船のマストも  
画面に異国情緒を添え、上流婦人を思わせる夜会巻とも  
イギリス巻とも云われる髪型。

なお容貌はませ子さんだけでも、病弱な彼女を気  
遣って、立ち姿は画伯の令嬢がモデルを務められたとか。  
美の追求とはこういうものか。

沢木氏のエッセイを契機に、モデルと周辺を巡って寄  
り道したお蔭で、この絵に一層親しみを感じるようにな  
りました。

**髪型の真似はできても立ち姿匂ひ立つなり築地明石町**

附録（三十三）

矢崎直人

成人の日の冬青空の青空よ

成人の日は冬晴れでした。その青空は雲一つない快晴で、未来が開かれているように感じられました。自分が成人になったというわけではありませんが、環境が変わっていく中で自分の気持ちや考えを改めながら向かい合うことが出来ました。俳句や短歌を作ろうとする時に、季節の流れの中に現在の自分を詠み込むにあたって辛いことや苦しいことを受けとめながら前に向かって進もうという力が生まれて来るように思います。

成人の日の冬青空の青空よ青き未来を見詰める眼

秒針の止まる試験場冬曇

社会福祉士の国家試験を受験しました。結果は来月に出ます。一先ず試験まで勉強した自分にお疲れ様です。仕事をしながら、受験資格を得るために学校に行き実習をしながら、頑張りました。

趣味の俳句と短歌を作り続けました。出来不出来はかなりばらつきがありました。常に時間に追われやつの思いで続けていました。弱気になって挫けそうになる時もあったり、悲しみや衝撃を受けて動揺するようなこともありました。その時、その時の感情や、心を捉えて離さない悩みにも俳句や短歌を作り続けていることで自分自身の気持ちに整理をつけることが出来ました。日々の学びに思いを重ねていくことで自分の中の揺るがない核のようなものに出会ったり、自分のことばにしていくことで新たな発見があったり自分がやりたいと思っていたことに気づくことがあったりしました。俳句と短歌を作る、作り続けていくことに自信を持つことが出来ました。

### 試験終え俳句と短歌に向かい合いまた改めて自分を見つけ

## 『プロフェッショナル』

中屋保之

半世紀以上の昔、就職先も決まっていたこの時期、然したる覚悟もなくのうのと過ごしていたような気がする。四十年不況を脱して経済拡大期に差し掛かっていた頃で、学生たちにとっては就職活動に然程の苦労はなかった、と記憶している。時は廻り、私たちの子供世代は一転しての「就職氷河時代」といわれ、親の因果が子に報いて苦勞をさせたようだ。

三世代目の孫たちはどうであろう。東京近郊の親元から都内の大学に通っている孫が、昨年からの就職活動に我が家を活用するために、ちよくちよく寄る頻度が高まった。着慣れぬ背広姿で出掛けることもあったが、ある日、外出する様子がなく部屋に籠りつきりなのが気になり、そつと覗いてみた。驚いたことに、P・C相手に何か受け答えをしているではないか、しかも、上半身だけ背広にネクタイ姿なのである。隔世の感有り過ぎで、「昭和のじじ」は驚愕するやら呆れるやらで、もう、追いてゆけません。SNS時代の一面を垣間見た。コロナ禍のため、学生生活の殆どをリモートで送る羽目になった影響もあったのだろう。濃密な交流が持てた私たちからすると、誠に気の毒と謂わざるを得ない。

そんな世代の青年たちがこの四月から新社会人として世の荒波に漕ぎ出してゆく。大半は、働いてその成果とし

ての報酬を得る、「社会人のプロ」になる。

チェンジウエーブグループ社長の佐々木裕子氏の記事を目にした。「働くということは、自分が何のプロフェッショナルなのかを問うこと。プロフェッショナルの語源は、プロフェス（誓い）【註 profess ≡ 公言】。己のミッション（使命）を公言し、働く場所や仲間を得て、それをやり切った人がプロフェッショナル。」と定義している。

プロフェッショナルの対義語が「アマチュア」である。近年このプロV・Sアマの垣根が極めて低くなっているように思う。自分は「何のプロなのか」を問うてその「使命」を公言しやり切る覚悟を持たねばならないのがプロへの道であるはずが、アマチュアにすら匹敵していないレベルの自称プロが目立つ。特に、政治家や「芸人」と呼ばれている人種にその傾向が強いように思われてならない。マスコミ関係でも数十年前からその傾向が強まっていた。かつて、仕事上で新聞記者からの取材に応ずる部署にいた折のこと、それまでは担当記者が来社し、面談のうえで紙面に掲載されていた記事がいつの間にか電話取材だけになり、それもなくなって、どこか別の処からの引用記事を多用、という体験をした。

四月から「プロフェッショナル」になる青年たちよ、自分の眼で、耳で、みて、きいて、自分の感性を磨いて、そして、働く場所や仲間を得るプロセスを大切にすることに手抜きは禁物である。

私たちにとっても警鐘であろう。

## 『酔いの徒然』（二五五）

丸山 酔宵子

### 『幻のビヤホール』

今から50年ほど前、神田神保町の駿河台下に操業明治42（1909）年の老舗ビヤホール「ランチョン（Lunchen）」があった。

良く通っていた頃から数年後、不慮の火事で焼失。現在は3代目がモダンなビルに建て替え、95年の歴史と味を受け継いでいる。

「ちょっと気取ったランチョン」という意味の「ランチョン」では、昼からビールの元祖で、小さなジョッキビールがワンコイン100円。フローリングの床にテーブルが置かれ、糊の利いた白衣に蝶ネクタイの小柄な白髪の先代が、カウンターに立ってビールを注ぐのである。

ビールは2回注ぎで、最初にビールサーバーから注いだ粗い泡を「竹へら」でさっと滑らかに落とし、そしてその上に丁寧な泡を注ぐのである。

「ランチョン」には場所柄、様々な文人や文化人が出

入りしていたが、行けば必ず会うのが、美味しそうにジョッキを傾け、学生と話し込む、吉田茂に勘当させられた英文学者の吉田健一であった。

### 昼からのジョッキ一気にもう一杯

酔宵子

将に同じ時代、東京八重洲口に、もう一人のビール注ぎ名人、新井徳司が経営していた「灘コロンビア」と言う伝説のビヤホールがあった。

壊れそうな古い建物の入り口玄関に、大きな昭和レトロ風、金文字で書かれた「灘コロンビア」の看板が掲げられた居酒屋で、外見では、とてもビヤホールとは思えない。平日の夕方は、開店と同時にすぐ満席。伝説の新井名人のビール注ぎの技で、ビールのおいしさを堪能するのである。新井名人の注ぎも2回注ぎで、最初は勢いよく注いでから、上面のきめの粗い泡を特性ナイフでややほじくり気味にさっとカットし、その上に更にもう一度丁寧に注ぐ。泡はあくまでもきめ細かく、マッチ棒がピシッと立つのである。

唇でクリーミーな泡を押しつけ、その下のビールをグ

イーツと喉へ流し込む。苦<sup>にがり</sup>灰かに、心地よい甘さが、やさしくのどを通り過ぎてゆく。

### 口髭に輝くビール泡旨し

#### 酔宵子

残念ながら幻の「灘コロンビア」は無くなってしまったが、その当時、新井名人の下でひたむきに修行していた紅顔の美少年、松尾光君が、1998年新橋「ビアライゼ98 (BIEREISE 98)」でその当時の幻の味を再現してくれている。

「ビアライゼ」とはドイツ語で「ビールの旅」。店内は東欧のビアホールをイメージしたシックな内装。

「灘コロンビア」から受け継いだ、70年前の希少なビールサーバーを使い、機械ではなく氷塊の管を通り注がれたビールは、言いようのないまろやかさで、唯一無二の味わい。

もう一つ忘れてならないのは、銀座7丁目の「銀座ライオン」である。

日本麦酒本社一階に建設されたのは明治32年。店内

に入るとゴシック風の重厚な高い天井と壁に、ジョッキの音と賑やかな会話が響き渡っている。正面に、ビール造りの大型モザイク壁画があり、ステンドグラスの窓から、光がアンティークな煤けた壁に差し込んでいる。

昨今の銀座は、インバウンドで銀座通りは外国人観光客で超満員、歩行困難のラッシュアワー状態である。

「銀座ライオン」は銀座のど真ん中の「GINZA SIX」ユニコロ」のすぐ近くで、店内はいつも外人観光客がテーブルを占拠していて、彼方此方で「乾杯!」「サルート!」「トースト!」「サンデー」……

ここで飲むビールはジョッキではなく液体と泡の黄金分割が見事なグラスで飲むことにしている。きめ細かい泡の冷え冷えビールグラスを「グイ、グイ、グイ、グイ……」。俺はこの時のために今日まで生きてきたのか」と思うほどの至福の瞬間である。

### ゴシックの天井響くジョッキの音

#### 酔宵子

## 春が来たよ

高橋育郎

春が来たよ

嬉しい春がやってきた。

心が躍る 体も踊る

舞い上がれ 空高く

海が見えた 山が見えた

さあ歌おうよ 喜びの歌

声高らかに 歌おうよ

おう春がきた 花が咲いた

春を知らせる綺麗な花よ

花よ 咲け もっと咲け

その美しさは平和の彩り

讃えよう 祈ろうよ

世界平和を

## 絹の話 (172)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

### 平安遷都と太秦と百濟王

聖武天皇の長岡遷都に続く平安遷都はどうして起こり、その財政はどのようにまかなわれたのでしょうか。

一般には仏教勢力が天皇の政を脅かす様になり、仏教勢力と一線を画する必要に迫られた事と奈良には大きな河川が無く人口増加の物資の流通に支障に生じて来た為ではないかと言われています。

### 仏教伝来

仏教は6世紀中葉に百濟から伝わったと云われていますが、実は3世紀初頭の三韓征伐後、秦から百濟方面に逃散して来ていた絹織物や土木、冶金、陶芸（土師氏）などの技術に長けた「秦」の末裔を名乗る技術集団が渡来し、彼等の作る絹織物の美しさは諸豪族を糾合す力を發揮し、隼人族を打ち破る事が出来ました。彼らは既に仏教を道教に代わる不老長寿を祈願する宗教として信仰していましたので、倭と秦の礎として両者の信仰を合わせた神仏混淆の宇佐八幡宮が造営されました。

またかつて中国の秦で万里の長城を築いた彼らの土木

技術は大古墳時代を招来し、その財政力は比類なきものになりました。

### 奈良仏教

奈良仏教は仏教を奉じて物部氏を倒した蘇我氏が時の政権（聖徳太子）と共に仏教による自然災害や病氣忌避の鎮護国家を目指した都市型仏教でした。

国分寺、国分尼寺の創設や東大寺の建立、受戒制度（鑑真渡来）、教学振興が計られ、僧侶は公務員的人格が与えられ、次第に東大寺や興福寺を中心に政治に干渉する様になりました。

### 平安仏教

平安仏教は玄奘三蔵（印度から帰国後三蔵法師）が印度で学んだ「人の心と宇宙の森羅万象（三千世界）」の唯論を日本に持ち帰った最澄（伝教大師）を桓武天皇が、空海（弘法大師）を嵯峨天皇が庇護し、比叡山（天台宗）と高野山（真言宗）に拠り京を守り、政治に不干渉な山岳仏教として広まって行きました。

### 平安遷都

奈良時代末期（781）に即位した桓武天皇は皇統変更（壬申の乱・天武系から天智系）による人心の一新を計り、政に大きな力を振るう仏教勢力から距離を置く為、

水利が良き秦氏の本拠地の長岡への移転が財政上で好都合と判断し、784年に長岡に遷都をしましたが、建設責任者が暗殺され、それにまつわる怨霊問題や度重なる水害や疫病などを鎮めなければならぬと、794年に平安遷都をする事になりました。

しかし度重なる遷都と坂上田麻呂の蝦夷征伐で朝廷の財政は逼迫してしまいましたので、太秦（秦氏の絹織物の集団地）の秦氏の力を借りるべく尽力しました。秦氏は渡来人ゆえ推古朝以来、外交関連の役務を担って来ましたが、この期に大倉省の中樞を預かる事にもなってゆきま

す。

もう一つ大きな支えがありました。それは白村江の戦い（663）で滅亡した百濟から百濟王と10万余の様々な職能集団が京、近江へ東国にまで避難民として居住していて、桓武天皇の母が百濟王の系類であった事もあり、彼等の優れた織物集団は大蔵省織部司に組み入れられ、唐からの舶来品にも優る高級織物を生産し、鉾山関係者は新たに支配した東国に砂金を発見して遷都の財政を大きく支えました。

### 平安京造営中止

平安京の規模は中国の唐の長安の1/4ほどでしたが、それでも都の造営が当初の計画通り進まず、途中で中止になってしまいました。

当時の京の都の人口は10余万人ほどで、左京を整備したらほぼ用が足りて、右京の方は放置状態になったのである。

その一つの大きな要因は労働力不足でした。

当時の日本の人口は600万人余で、平均寿命が40歳前後でした、白村江の戦いの後の倭の国防策は海外出兵をやめて、守りを固める事に専念し、九州方面に強固な防塁を築き防人（3年）を置き、都の警備の衛士（1年）も増員したので兵の召集に苦慮していました。そこに蝦夷征伐で各地からさらに多くの若者を徴発したので、生産人口が減少し租庸調の税収も難儀になり、都の造営は未完成のまま今日に至っています。

この当時は班田収授の法がまだ少し機能していて、男子は6歳で約2アールの土地がもらえましたが税が課せられ、6歳ではまだ税が払えないので、戸籍登録は女性（女子は男子の2/3の土地を取得し無税）が多かった事も一つの要因でした。さらに無税の寺社仏閣、貴族の荘園が増え、税収が伸びなく、時代は律令制度崩壊に向かって行きます。

宮中にも財政改革が及び、賜姓制度を創設して桓武天皇の50余人の皇子の多くが臣籍降下して「平」姓を受けて各地に任じられて行き、平将門の様な武士が生まれてゆくのです。

嵯峨天皇の皇子は「源」を賜りました。

## 「江上浩二の独り言」 87 江上浩二

気まぐれに呟く

本来であれば、昨年十一月頃に咳こうと思っていた。それがずるずると今日令和七年一月二十三日まで延びてしまった。その理由は一月二十日に行われた米国大統領の意思表示であった。

もし私ごときをつまらない呟きが、多くの憶測に基いた不確かな情報とも言えない話で、近い将来こんなバラ色に包まれた様な事になるのではないかと、一抹の不安があったことや二・三の些細な優先させたいと事があって、今日になってしまったというのが本当である。

もうコンサルタントをしていると、嘘八百とは言わないが、結構推定・予測・統計データに基づいて作成したモデルとか将来像を自分の真念と業界の一般的にはという他人にすぎるような常套手段でお茶を濁す様な事も多い。

民主主義とは

立候補者の要件について、私なりに以前提案させて

頂いていた。

Democracy vs Republican という構図になった昨年の米国大統領選の結果で、私なりに勉強になったことは多数決とかの手法でない、米国の富裕層と労働者層の歴然とした対立の構造になっている事。

国内では、急遽行われた衆議院議員選挙の結果、選挙前の与党勢力が少数与党（I首相率いる）へ陥落。兵庫県知事選の結果、S知事が再選されて、SNSが候補者の公約や政策の浸透のという面で若者へのアピール効果が高いことを示し、このSNSの効果は昨年の夏前の都知事選で既に相当な力になることも分かっていた。これは民主主義の政策・広報と言う面で、所謂ニセ情報の発信をいかに防ぐかという課題（有権者の行動等の要件）を突き付けた。

ここでもう一度、民主主義とは、について纏めると立候補者の要件・選挙中の広報手段・有権者の要件の三点に十分に注意して議論しなければならないことが解る。米国大統領選挙結果が判明した後、さらに関心の高まりにより、T大統領の宣言まで聴いて確かめた後になってしまった。米国の要求が米国の有権者のみならず、非常に明確で、世界の一般の人が分る言葉で表現されていたことであった。

国内でも、最終的に腑に落ちて、納得した事は有権者、

全ての団体が暮らしを良くしたい、特に法人税や個人の所得税減税を望み、国内ではこれまで高齢者向けのインセンティブを優先的に諸策の検討をしていた流れを少子化対策へと変えて、予算のある、金のある地方自治体が、子供医療費、給食費、義務教育でない高等学校の授業料無償化、さらに大学授業料の無償化まで要求が拡大し、そのための予算枠を確保出来るのか否かの議論に落ちてしまっているように見える。

我々のような七十歳を超えた高齢者は振り返ると昭和二十八年生れが境であった。戦後のベビーブーム・昭和二十二年生より少し後の世代の話をしてみる。先ず、義務教育で必要な教科書は有償であった。それが、昭和二十九年生れの世代からは無償になった。私の世代は給食も小学校まで、東京のような大都市では給食は中学校まで、勿論給食費は必要だった。大学入学時に国立大学の授業料を3倍にする法案が通り、3倍になった。この大変化は当時の政局をストツプさせ、予算が可決したのはズレ込み4月に入ってからで、3月下旬の国立大学の手つづきでは旧来の授業料や入学金を納めて終わった。が、もう一つ、大学入学時の授業料が従来だと4年後の卒業時まで続くのであるが、昭和四十七年の特例で、4月に入って可決した3倍もの授業料を後期から納めろということだった。

さて、国内も米国も有権者の要求は本当に自分の暮らし向きをただ良くしてくれそうな立候補者を選ぶことに集中し、本来は政治(祭りごと、国を治める)であって、国民主義・基本的人権の尊重・平和主義(国の安全/国防)というの憲法に規定された主意を維持するための、法律(簡単に言う人と人として生きていくためのルール策定・周知・施行・ルールを犯した場合に対する処置)などを規定する三権分立の立法を、掌らなければならない。

自分の暮らし向きをよくしてくれる候補者を希望し、皆様もご理解頂けると思うが、一地方の議員さんが対処出来る課題でないことはT大統領が次々と署名していく米大統領令の内容は日本一国でも対処できない、とても幅広いグローバルな連携と具体的な実施し得る行動的施策ばかりで、相当な経験、紙上だけの勉強ではない多国籍企業のマネージャのような実務経験や海外留学で培う人的コネクション(ふとしたことで、後になって役立つ異国の輩と知り合うこと)、さらにこの分野ならば任せとくれと言える秀でた専門性まで身に付けておきたい。

単に民主主義とはと言った事では済まされず、経済至上主義だけでもいけない、そこは焦らずに時間をかけてもいい、先ずは自分をスタート点として、皆様が全く同じ環境に居るわけでもないのです、それぞれ考えて行けばいいのではないかと思つた次第です。



初狩便り  
(40)



花野みぷり



## 藤沢集落

初狩のJ・R中央線と甲州街道からも、私たちの田んぼや畑からも、富士山は見えない。富士山大好きな仲間たちが富士山を見に行く場所がある。

初狩駅から藤沢川沿いに二十分ほど登ったところの藤沢集落だ。富士山が良く見えることから「富士見沢集落」と呼ばれることもあるとかないとか。日当たりのよい南向き斜面にある九十戸ほどの民家はどこもなつかしいような佇まい。小さな蔵があつたり、木造の納屋があつたり、生垣や庭木はきれいに手入れされている。春から秋は花が咲き、冬には秀麗・富士がすつきりと望める。

集落の一番奥に子神社おのじんじが鎮座している。いつもきれいに掃き清められ、小さな手水舎もある。誰かがお守りし手入れや掃除をしてくれていると思うが会ったことはない。神社にお参りして振り向けば、鳥居越しに富士山が望める。脇には樹齢三〇〇年以上といわれる大月市指定文化財の「藤沢の大杉」がある。滝子山の登山ルートになっているので、山を背負っていて朝晩の冷え込みは厳しそうだが、静かでおだやかなこんな集落に住んでみたいと思う。

(写真 矢野都紀子)

## 本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2025年2月15日

花粉？ ウイルス？

昨日から風も冷たくなり

再び寒さが戻ってきました

3S+ゆたぼん+ヨーグルト+八分+湯船

を確実にやっています

今の時期鼻水が出る症状が多く感じます

花粉なのか？ 風邪なのか？

基本的には 鼻水が透明ならアレルギー

色がついている場合なら ウイルス

と度々書かせていただいています

ただ 透明でも 風邪の初期症状の場合もあります

判断が中々難しいですよ

そこで

鼻水の粘着性が少ない（サラサラ）アレルギー性

鼻水の粘着性が多い（ねばつく）ウイルス性

の可能性があるような気がします

あくまでも体調や環境も影響してくるので

参考までにですが

それに 1週間以上症状が続く場合 アレルギー性

1週間以内におさまる ウイルス性

などなど

身体の症状をあわせて判断してみてください

今日も笑いながら楽しんで行きましょう

2025年2月10日

## 便座上の姿勢

寒暖差に加え

冷たい風と乾燥のご最近

体調管理が難しくなっています

引き続き

3S+ゆたぼん+ヨーグルト+八分+湯船

をやっていきましよう

本田カイロにいらっしやる患者さんから

「便秘ではないんですが便が出にくくて」

という質問をうけます

確かに

寒くなると水分摂取が進まなくなりますよね

更には 冷えから腸の動きも悪くなります

便は出るけど出しにくくなる

これは便座に座っている姿勢で多少は改善できます

まずは背筋を伸ばして姿勢よく座わってみる

その状態で出にくかったら

軽く前傾姿勢を試してみる

これは

彫刻の 考える人 の姿勢 みたいな感じですよ

その時に

口を開け続けてやってみて下さい

良い状態を探しながら続けましよう

便座に座っている時間は5分までにしましょう

今日も笑いながら楽しんで行きましよう

## 「息の役割」

人は息して生きている

吸う息 腎が主り

吐く息 肺が主る

吸う息深けりや 腎刺激

吐く息深けりや 肺刺激

しつかり呼吸で刺激すりや

生きる力が 湧き出てくる

腎は先天 両親より

さずかる精を 蔵しており

生きる基本の 遺伝的

情報正しく 機能させ

睡眠通して 精養い

成長・進化を 主る

腎が動けば 本能が

しつかり働き 力湧く

肺は華蓋かがいで 外の幕

表面覆いて 外感そとじ

身体からだの内側 外側の

均衡を保ちて 調節す

呼吸を通して 気を巡らせ

経絡機能を 主る

肺が動けば 感覚が

しつかり働き 適応す

今の時代は 外からの

過剰な情報・刺激にて

息は詰りて 落ち着かず

吸う息浅けりや 腎弱り

吐く息浅けりや 肺弱り

眠りも浅くて 気も弱り

本能・感覚 発動せず

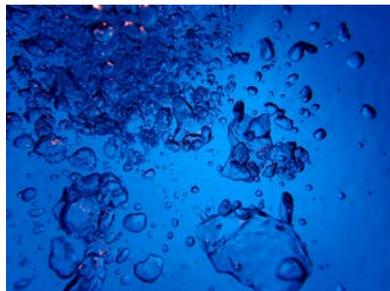
どの様ような時代の変化にも

落ち着き 息を深めれば

自おのずと内から 調しらいて

やるべきことが 見出され

ゆつたり適応・進化する



## 「息することは交流なり」

人は息して生きている

吸う息 酸素を取り入れて

吐く息 二酸化炭素出し

呼吸を通して その空間と

交流しながら生きている

酸素は 環境・場の情報

含まれ 吸い込みや血液に

その場の情報 乗っかりて

どの様な場なのか 全身に

血を通して 伝えてる

二酸化炭素は 生きてきて

酸素を消費 した結果

生み出される 気の物質で

吐く生氣 人が生きてきた

経験・情報 外に出す

人は息にて交流す

吸う息 情報取り入れて

吐く息 情報 吐き出して

同じ空間 共にする

人や家族や仲間など

その場で生きる 人同士

言葉がなくとも 情報の

交流・共有 しているぞ

だから、家族は言葉なく

相手の状態わかるもの

人が集まる学校や

仕事の間なども 同じこと

同じ空間 共にして

息をしながら 活動すれば

言葉以上の情報の

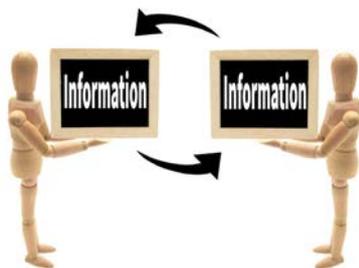
やりとりできているものぞ

故に 人の理解には

直接会って息かわす

これが本当の人の交流

人間理解の 第一歩



精邱先生より音書を拝受して作有り  
せいきゆうせんせい おんしよ はいじゆ さくあ

櫻臺楼主人 殿 山木風

人生老に入つて 尚蹉跎たり  
じんせいろう い なおさ た

庭際春を迎え 風雨多し  
ていさいはる むか ふうう おお

訪ぬ可し 無門 無限の景  
たず べ むもん むげん けい

野香野鶴 是れ如何  
やか やかく これ いかん

自精邱先生拝受音書有作 (令和六年)

人生入老尚蹉跎 庭際迎春風雨多

可訪無門無限景 野香野鶴是如何

(語釈) ○精邱：徳田宗一氏の吟号。去年お手紙を戴いた。○老：七十歳。○蹉跎：思い通りにゆかない。○庭際：庭。○無門：精邱先生の畑にある小屋を無門丘小屋と称している。○野香：野の香り。○野鶴：官に仕えず世をさげ隠れている人。

(通釈) 人生は七十歳に入ってもこの方、なお思い通りにはゆかない。我が家の庭に春を迎えたが雨風が多い。(花発いて風雨多し・于武陵)と詠われているとおりだ。

お手紙では精邱先生は悠々自適の生活。畑の小屋を「無門」と名付けているが、訪ねてみようか、入り口も出口も特にない、たぶん自然に囲まれて限り無い景色であろう、

野の香り、淡々と畑に向かっている人はどんな風であるのだろうか？

※ 精邱先生は奈良は生駒に住む。弊流の生駒支部を率いている。生駒は古都奈良のお隣である。景色には田舎びた風味があり、歴史的郷愁を想わせる。何年か前に支部の記念大会に数人で伺った。電車で目的の手前の駅で降りた。タクシーがあるかどうかでの案内だった。

奈良に入る頃より日が暮れてゆき、車窓の景色から明かりが消えていった。家の明かりも乏しいのである。何だか、今時珍しいような心細い気持になった事を覚えている。

「無門」の言葉が気に入った。自然の中の畑のイメージが広がった。視野には境も何も無い、鉞でも担いだ一老人が居る。手紙を読みながら心が緩んだ。

我が家の櫻臺楼も気に入っているが、気晴らしに眺めを変えて楽しんでみるのも良い。  
今年は拙詩の通り一人で伺ってみよう。

春のくも鉞持てあそぶ一古老

編集室だより【二〇二五年三月】

今泉 由利

歌集「地球にて」

一九八〇年

亀<sup>かめ</sup>と呼ぶ声聞こゆマルガリータの唯一知る日本語にて

この夏には三十センチは伸びたつと計算しており鉢のオンブー

ひと腕の汁に三つ葉の香り欲し居間の日向に水栽をする

何を食へ何を控える当もなくアンモ貝の化石を買つてしまいいぬ

物が皆立体に見ゆるこの頃は新しき次元に住みいることし

太陽を吸いたるトマトのまる嚙り塩の砂漠の塩ふりかけて

買い置きしキロを単位の洋紙をも反古となしたり裸婦を描きて

一本のサッカーのテープ持ちおれば五度目のパーティを開かむとする

味噌を漉し味噌汁つくれるマルガリータ帰りゆくべしパラグワイ国へ

一年の終り近づく春の花プエノスアイレスハカランダの花

目覚むるも眠るも境なきごとくパナマに着きぬとろとろとして

わが膝に体温伝えて眠る子よ三ヶ国を経来て時差の混乱す

蟹かとも紛<sup>まが</sup>う味する蝦を食べ運河ゆく船の風景の中

探すものあるというにはあらずしてコロンにまた来つ十三年経て

眼を伏せて貧しきものを阻みたきコロンの暑き町中を歩く

それぞれの国の空気の異なるも五ヶ国目なるバンクーバーは淡々<sup>あわあわ</sup>

三百平方の氷の広場求め来ぬ子等とはるばる二万五千キロを

アンデスアマゾンロッキーナイヤガラ地球儀と同じき本物がある

なつかしむごとくに話すスペイン語ロッキーの風の冷たき所

わがためにシェリト・リンドを弾かして船に遊ぶも旅人なれば

小雨降る撰氏八度のバンクーバーわが立つ位置を地図に指さす

一年に十七センチ背丈ののびし子と連れだちてゆく本門寺辺り

湯煎する蜂蜜の香よりよみがえるアルゼンチンのカンボの香り

日本の図鑑を調べ三、四冊メキシコの草は名を知らぬまま

ピラミッドの石を割りて咲きおれば雑草にしてだんご菊に似る

東京の水に馴染まぬ一ヶ月わが肌すべりしパナマの水は

二万キロ飛びきたりたる東京にて逢い難きかな久我山遠く

見ゆるものに心も眼も奪われて私の住いのアルゼンチン朧

幼子はたちまち靡くドラえもん日本の国に流行るドラえもん

重心の低くなりたり日本に暮して畳に和紙広げつつ

踝が大きく見ゆる日本の裸婦に向えり清々として

かみしめて読むと言うには非ずして日本の書物積み重ねおく

金時と名付く諸の焼けてくる匂いただよう田園調布

インドより来りてわが掌にやさしやさしインジゴ藍の沁みし木片

凍る日の少なきままに日本の冬終りゆく洗足の池

家に着くまでに決めたきこと一つ田園調布の狭き歩道を

お茶を煎る香りただよう細き道日本の町を幼子とゆく

ほのかなる鯛焼のぬくもりに頼りつつ次の電車を待つ五分間

あと十日日本に暮らすわが部屋に蕾の硬き白玉椿

陽の当たるところに集いし束の間を言いつつ帰る新横浜へ

窓に着く鋭き氷の結晶と共に翔びゆく地上二万メートル

金の国ペルーを通りぬわが指に慣れざる黄金色に戸惑いながら

何グラムかも知らずして一片の黄金というものの所有者となる

戸惑いもなきまま二万数千キロ旅の時間のわれに過ぎゆく

辿り着きしアルゼンチンのわが家よりまず仰ぎ探す南十字星

私の棲むアルゼンチンにはアルゼンチンの雀飛びおり日本に似て

ジャスミンの二花浮ぶ茶を飲んで昼の仕度に立ち上りゆく

おかあさんと呼ぶ声に幾度もふり返る日本の国には日本語の満つ

テレビより聞こえてきたるスペイン語笑う幼子わからぬ私

三州とわずかに読める欠け瓦西日暮里にて歩みをとどむ

## 「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三  
東京都渋谷区恵比寿三・四五・三  
フォーレストヒルズ三〇二  
ケイタイ 090・8434・8646  
TEL 03・6765・5838
- ◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>  
E-mail [imayurizm@gmail.com](mailto:imayurizm@gmail.com)
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇どなたも参加、投稿いただけます。  
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。
- ◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、  
メール、お届け下さい。
- ◇会費制は廃止。
- ◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、  
創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。
- ◇令和七年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。
- ◇編集・発行 今泉由利